



明治43年の日蓮寺(名古屋築山より)

七月から「弘法さんの日」に配布させて頂いています。「弘法さんかわら版」も第5号をお届けできるようになりました。たくさんの方が笑顔で受け取ってくださいますので、編集部も毎月二十一日が楽しみです。今後とも、ご愛読をよろしくお願い致します。「かわら版」のバックナンバー(過去の分)がご入用の方は、遠慮なく編集部(大塚耕平事務所・〇五二・七五七・一九五五)までご連絡下さい。

# 弘法さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

Kouhei@oh-kouhei.org

さて、先月号までは、お釈迦様の骨(仏舍利)が名古屋の地にたどり着くまでの、先人たちの努力と、数々の苦難をお伝えしました。では、名古屋の中でも、どうして覚王山(当時、愛知郡東山村大字田代)が塔廟(仏舍利を正式に納める所)の候補地として適していたのでしょうか？

これまでの調査で分かった理由は二つあります。一つは、当時の東山村が、仏教と縁が深い地域だったからです。覚王山に代々住んでみえる方からお借りした「**東山名勝**」(大正十年発行)という資料によれば、当時の東山村は、東西を結ぶ**法六字街道**(鍋屋上野火葬場道)、南北に走る**四観音道**という2つの参拝道の交差点だったようです。

とくに四観音道は、「**尾張四観音**」と関係する重要な参拝道でした。「尾張四観音」とは、**笠寺観音**(南区)、**荒子観音**(中川区)、**竜泉寺観音**(守山区)、**甚目寺観音**(海部郡)の四観音を指します。徳川家康が名古屋城築城の

際、城下町の鬼門の方角に位置した四観音を「名古屋城鎮護」と定め、結界を張つて名古屋城を護るうとしたことが「尾張四観音」の始まりです。

東山村を通っていた四観音道は、このうち笠寺と竜泉寺を結ぶ道です。現在の覚王山西交差点から北東に入る細い道（下り「自転車さん裏」から松楓閣、日泰寺西、東山給水塔横を通り、現在の天満緑道につながる道だったそうです。今でも道の名前が地名に残っています。「かわら版・第2号」でお伝えした**鉈薬師**の前が「四観音道西」、日泰寺北の東山給水塔辺りを「四観音道東」と言います。今まで深く考えたことのなかった地名にも「なるほどなあ」とうなずかされます。また、「覚王山郵便局」から「丸山神社」へぬける道がその延長になります。

もう一つは、当時の**東山村**。

**加藤慶二村長**の尽力によるものです。加藤村長は自らの私財を投じて誘致活動に奔走し、有志の協力も得て十数万坪以上の土地の寄進を実現しました。広大な寄進地を用意できたことが、誘致成功の鍵だったのではないのでしょうか。加藤翁は村長を二期務め、地域の発展に献身的に尽くされ、日暹寺（につせんじ

「日泰寺」と東山（覚王山）興隆の多大な功労者だったそうです。古来から、寺院の誘致によって縁目を開き、参拝客に散財して頂くのは、地域経済にとつて**重要な景気対策**だったそうです。加藤村長はそういうこともお考えだったのかもしれませんが、加藤村長、ありがとうございます！

その後の覚王山の賑わいは、今では想像できないほどだったと言います。日泰寺周辺の半径数百メートル以内に収まっているお手軽な「八十八ヶ所霊場巡り」が大人気で、その人氣に目をつけた「**弘法さん**」の縁日との相乗効果（今風に言うとしナジ「効果」も働いて、覚王山までの路面電車は大混雑、臨時電車を出してもさばき切れないほどだったそうです）。

覚王山商店街の皆さん！覚王山に再び以前の賑わいがよみがえるよう、一緒に頑張りましょう！

次号は、覚王山界隈の地名の由来を探ります。おたのしみにも。

参考資料：「東山名勝」「えいなも探偵団」「旧代」他

